The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	フィールドワークの重層性 : 2017年度「日本学方法論の会」参加記
Author(s)	鎌倉, 祥太郎
Citation	日本学報. 2018, 37, p. 27-30
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71619
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【特集】

フィールドワークの重層性

2017年度「日本学方法論の会」参加記

鎌倉 祥太郎

とんでもなく私的な話題から始めて恐縮だが、わたしは高知県中部、四国山地の中にある町の出身である。全校生徒100人に到底満たない過疎の町で小学校卒業までを過ごし、中学校から親の仕事の都合で高知市内に移った。こんなことから筆を起こすのは、「体験的フィールドワーク論　～民俗学者・宮本常一の足跡をたどることから～」というテーマで開かれた今年度の方法論の会に、わたしが参加することにしたきっかけがこの点にあるからである。

今回の会は木村哲也さんを招きおこなわれたが、木村さんもわたしと同じ高知県出身であるという。とはいえ、同郷人に会えるという地域ナショナリズムを背景とした懐かしさから参加を決めたのかというと、少し違う。今回の会に参加する前、Webサイト『人間学工房』で連載されている木村さんの「宮本常一伝ノート」[1]を読んだのだが、ここには木村さんの出身である高知県西部のことが何度か記されている。東西に長い高知県は、東と西で文化が異なり、とりわけ県西部は幡多地域と呼ばれ、方言も異なる（県中部から東部にかけて話される方言を土佐弁、西部で話される方言を幡多弁という）。数年前、自動車専用道路が幡多地域の入り口である旧窪川町（現四万十町）まで延伸したとはいえ、まだまだ県中部とは距離的にも遠く、わたし自身あまり馴染みがあるとはいえない土地である。そんな、わたしの実感としては近いようで遠い幡多地域のことが、「宮本常一伝ノート」には生き生きとした姿で描かれていた。これを読み、恥ずかしながら同じ県内と高を括っていた幡多地域に対するそれまでの認識を改めさせられた。言い換えれば、小さな県の中央意識に気付かされたということだろうか。このことが、民俗学が専門なわけでもなく、また意識的にフィールドワークを方法論として用いたこともほとんどないわたしが今回の方法論の会に参加しようと思ったきっかけである。

長々とわたし自身の参加に至る個人的な経緯を書いてしまったが、木村さんの報告では、自身のフィールドワークでの体験に基づいて様々な問題提起がなされた。以下何点か特に印象深かった論点を取り上げてみようと思う。

土地を結び直していくこと

まず取り上げたいのは、黒潮に沿って点在するサンゴ漁師たちについての話である。高知県幡多地域にある月灘（現大月町）は、かつてサンゴ漁で賑わった地域であるが、その一方で先述したように同じ県内の高知市などからも相当に離れており、「陸の孤島」と形容されることもある。同じくサンゴ漁がおこなわれていた長崎県五島列島の富江も、「絶海の孤島」と称されることがあるというのだが、木村さんは、この五島列島への旅で、自身の郷里の方言とかなり近しい言葉を発見している。甚だしい、を意味する「ざまに」という幡多弁に対して、富江では「ざあま」という言葉を使うそうだ（ちなみに、同じ高知県でも土佐弁では「しょう」と全く異なる言い方をする）。月灘のサンゴ漁師が明治期に五島列島にサンゴ漁をもたらした、という伝承をもとに、同じ「孤島」と呼ばれた月灘と富江でサンゴ漁師を通じた交流があったのではないか、というのが木村さんの仮説である。

木村さんの報告ではさらに、干したサツマイモを蒸かしてモチ米と一緒にモチにするという他にあまりない文化が月灘と富江、そして同じようにサンゴ漁がおこなわれていた鹿児島県下甑島に共通するということを発見することによって、その確信が深められていく、というスリリングな展開を辿ったのだが、興味深いのは海とサンゴ漁を通した広域での文化交流の再発見が、木村さんのフィールドワークという行為そのものを通じてなされているという点だ。木村さんはこのことを「旅する土地が結び合う」と、フィールドワーカーによる歴史の再発見の過程に力点を置いているが、一方で現在という時空間において土地と土地とをフィールドワーカーという存在が、再度結び直しているのだと表現することもできるだろう。個別具体的な事柄を旅によって結び直し、普遍的な問題を照らし出すことは、フィールドワーカーを一つのメディアとして機能させることでもあるように思われる[2]。木村さんは、このサンゴ漁師の相互的な文化交流についてまとめた先述の「宮本常一伝ノート」の一節で、このように記している。

> 一連の旅を終えて、ローカルな事例にこだわることで、普遍的な問題に至る道があることに気づかされる。ここで旅した高知県月灘、長崎県五島富江、鹿児島県下甑島はいずれも「陸の孤島」「絶海の孤島」と呼ばれてきた地域である。しかし日本の近代史の流れのなかで、サンゴ漁を通じて遠く離れた地域どうしが結びつき、コーラルロードを通じて地中海ともつながっていた。 サンゴは、「辺境・周縁」の隠喩でもある。そこから見渡せば、中央から見た歴史観、世界観は改められるだろう[3]。

ここでは、固定化された地方への眼差しが「新たな地域像・歴史像」として編み直されていくことが述べられている。旅によって土地を結び直していく行為が、歴史を絶えず更新

させていくことでもあるというのは、重要な指摘であるだろう。

フィールドワークにおける“出会い”

木村さんの報告では、フィールドワークで実際に会い、聞き取りをおこなった人びとについて、写真やその時どきのエピソードを交えながら語られた。そうした方々の中にはすでに鬼籍に入られた方もいたと記憶しているが、木村さんの報告を聞いていると、木村さんがフィールドワークで出会った人びとに、自分もまた会ったことがあるかのような不思議な感覚を覚えた。それだけ、木村さんが語るエピソードが具体的であり、またそれら一つ一つの出会いを木村さん自身が大切にされているということなのだろう。

そうした一つ一つのフィールドワークでの出会いを語りながら、木村さんはいくつかの問題提起をおこなっている。当日配布されたレジュメに従うなら、「下調べは必要か」、聞き書きの相互作業性、「受け売りで話す人、誤りを話す人」といった、フィールドワークの方法論的なところから、「庶民に生きる「公正（フェアネス）」の感覚」というような、フィールドワークを通じて木村さんが発見した市井に生きる人びとの生活感覚といったところであろうか。とりわけ、これも具体的なエピソードの中で語られた、インタビューにおける語り手の沈黙、そうした「断言できない、明確に話せない、簡単に白黒つけられないところに真実はあ」り、聞き手がインタビュー内容を安易にまとめすぎてしまうことへの警告は、テクストにおける書き手の躓きを対象化しようとしたわたし自身のこれまでの研究と共通点が大いにあり、改めて考えさせられる内容だった。

重要なのは、フィールドワークにおける出会いをどのように位置づけていくか、ということではないかと思われる。対象との出会いを初発の動機とし、それを記すような研究は多いが、意識的に、そうした出会いを方法化していくような研究は少ないのではないか。もちろん、そこには安易な一般化や抽象化の危険が常に付きまとう。しかし、対面した人びとの生の顔を思い浮かべながら、その個別具体的な相互経験としての出会いをどのように方法化していくのか、という点について、木村さんの報告のなかにそのヒントがあったように思う。その一つとして、やはり先に引用した「ローカルな事例にこだわることで、普遍的な問題に至る道」が、それぞれの出会いにおいても目指されるべきなのだろう。一つ一つの出会いにこだわりながら、それを意識的に開いていこうとすることが必要とされているのではないだろうか。

さいごに

この参加記では、木村さんの報告で述べられたいくつかの論点を、わたし自身の興味関心に沿って雑多に取り上げてきた。ただ、報告の内容もさることながら、とりわけ印象深

かったのは、木村さんの報告におけるその軽やかな語り方であった。それは、宮本常一の足跡を辿って軽やかに旅をしていく木村さんのフィールドワークのスタイルと、きっと相即的なものなのだろう。報告の最後で木村さんは、学問における「遊び」の重要性について触れている。遊び心から好奇心や感動は生まれ、それが学問を動かしていく原動力となる。こうした木村さんのスタイルこそが、生き生きとして軽やかな語りへと繋がっているのだろう。そのことは、フィールドワークにおけるアンテナの広さや対象への真摯さなどと決して無関係ではないはずだ。

……さいごに、これは全くの蛇足で余談ではあるのだが、会の懇親会が終わった後、木村さんの話に触発されたわたしは、石橋から自宅の吹田までの10キロちょっとの道のりを初めて歩いて帰ることにした。大阪北部から南に向かうと緩やかな下り坂になっているとわたしは思い込んでいたのだが、実際に歩いてみると思いのほかアップダウンが激しく、その坂沿いに住宅地が広がっていた。実際に歩くことで、電車の路線図中心だった自分のメンタルマップが更新されていくという至極当たり前のことを、人っ子一人通らない真夜中の道を歩きながら新鮮に感じることができた。

注

1　木村哲也「宮本常一伝ノート」『人間学工房』https://www.ningengakukobo.com/dennote（2017年12月10日最終閲覧）

2　この点に関しては、フィールドワーカーとしての松本清張を新たな物語や価値を創出する「メディア」として捉え直そうとした重信幸彦「「採集」する身体（メディア）へ」『松本清張研究』8号（2007年）が参考になると思われる。

3　木村哲也「宮本常一伝ノート［03］高知県月灘のサンゴ漁　旅する土地が結び合う」『人間学工房』https://www.ningengakukobo.com/single-post/kouchitsukinada（2017年12月10日最終閲覧）